電車が来るまで二三分あった。
通り過ぎて、気になって振り返ると、
丁度、フォームが丸くカーブしていて、
彼女がベンチで座っていて、
足の、ひざ当たりから下のところだけが見えた。

「戻ろうか。
声をかけようか。
動いてくれ！
こちらを向いてくれ！」

そう思ったが、彼女は、全く動く気配なかった。
彼女の顔は、僕がいるところからは見えない。
そうこうしているうちに、
三条行きの各停が来た。
彼女は僕の電車には乗らなかった。
彼女はそのまま誰かを待っているように
ベンチに下を向いて座っていた。
電車に乗ってしまって、僕はまた後悔した。
「逆に自分は彼女にはどう映ったのか。」
と思うと、泣きたくなる思いだ。
電車が、動き出した。